

series Salamander in the circle

# リ・コンストラクション

第一章

*Red thread*

峯村 明

# リ・コンストラクション

## 1・Red thread

prologue.

071.

072.

073.

074.

075.

076.

あとがき

奥付

## 1・Red thread

prologue.

全財産をはたいて、切符を買った。

新加坡(シンガポール)へ行こう。絹子(きぬこ)を連れて、そこへ移り住み、新しい生活を築くのだと、決めていた街だ。

まあ、どこでも、なんでもいい。そこへたどり着く前に私は――

070.

私には洋々たる未来があった。

都会の大きな貿易会社で働き、夢中で知識をむさぼり、信用を得、将来のために金を蓄えた。ある日、社長から呼ばれた。跡を継いでくれまいか、というのだ。それも、社長の一人娘、織絵（おりえ）と共に。

言葉を失った。

私は独立するつもりだった。私には故郷に愛しい娘がいた。初恋のひとで、絹子（きぬこ）という。いずれ独立し、絹子を連れて海外へ移住する。それが私の夢、否、現実的な計画だった。

きっぱりと社長の話を断ればよかったのだ。

だが……令嬢織絵の教養の高さと美貌が私を惑わせた。なんということか。私は絹子と織絵とを天秤にかけたのだ。かたや余寒にほころぶ一輪の梅、かたや春うららの満開の桜。性格はまるで違うがどちらも美しい。どちらに転んでも損はない、そんな欲得勘定が働いたのだった。

そのような経緯が、どこからどう漏れたものか。故郷の絹子の耳に入ってしまった。絹子は私を軽蔑し、絶望し、気がふれた。私は動転して帰郷し、絹子に会おうとしたが、家人に拒まれた。

狭い田舎でそんな話はあっという間に拡がり、父母は針のむしろの窮地、私は都会へ逃げ戻った。だが、私を待っていたのは社長の冷たい目と、解雇の通告だった。

過ぎ去りし、輝かしい日々。

初恋のひとを死ぬよりつらい境遇に突き落とし、公私に渡ってありとあらゆる信用を失った。

もうだめだ、

郷里の両親へはできうる限りの金を遺した。私にはもう、なにもない。思い残すものもない。

071.

「いい月夜ですねえ」

今まさに甲板の手すりを越えようという時に、声をかけられた。のんびりとした、やわらかな、男の声音。これがもし、「やめろ！」「早まるな！」「ばかもの！」といった怒声だったならば、私はそれらをすべて振り切って……むしろ、その否定的なひびきに後押しされていただろう。

見れば——雲の多い夜空には細い三日月。強い風が頬をなぶり、とても、いい月夜だと言える風情ではない。反射的に、いい加減なことをいうな、と怒鳴りそうになり、手すりを越える瞬間を逸ってしまった。超越の瞬間はみるみる遠ざかって行った。

私は手すりを突き放し、へなへたと座りこんだ。声をかけてきた男がゆっくりとした足取りで近寄ってきた。かがみこんで私の腕をとったその男を見上げて、少しばかり、驚いた。彼は日本人ではなかったのだ。彼は流ちょうな日本語で言った。「風が強くなってきた。ほら、甲板にはもう誰もいない。さあ、中へ入りましょう。わたしの部屋に、いらっしやい」

\*

言われるままに、男の部屋へついていくと、眠たそうな顔の少年が出迎えた。

「あれ、先生、お客さんかい？」

「ああ、お茶はわたしが淹れるから心配いらないよ。きみはもう寝なさい、ヤスノスケ。もう遅いからね」

ヤスノスケと呼ばれた少年は……十五、六だろうか……私にも「おやすみなさい」といい、引込んだ。

\*

ラウレンスという名の西洋人の男の部屋へいざなわれ、そこで私は一夜を明かし、問わず語り、海に飛び込もうとした経緯を語った。私の犯した過ちのすべてを、その過ちゆえに、私にはもう帰るところも行く先もないということも。ラウレンス氏は黙って聴いていた。

愚かなやつだと、呆れたければ呆れるがいい、嗤いたければ嗤うがいい、誹りたければ誹るがいい。私にはもう、守るべきものなど、なにもないのだから。

語り終えたころ、白々と夜が明けてきた。

072.

ようやく、ラウレンス氏は口を開き、思いがけないことを言った。  
「お話からすると、あなたは商才がおありのようですね」

笑うしかなかった。まったくだ。損得勘定と欲得勘定の結果がこの始末だ。

「あなたは、ご自分にはなにもないというけれど、ちゃんとあるじゃありませんか。才能というものは欲しくて手に入るものではない。それは与えられるのです。人間はただその才能を生きるのです」

私は思わず聞き返していた。「あの、ラウレンスさん、それはあなたがたの宗教ですか？」

「え？ いやいや。わたしがそう思うのです。わたし自身がそのように生きたいと思っています。す。

あなたは商売に関する能力が人並外れて高かった。貿易会社の仕事が楽しかったのではありませんか？ それはその方面に才能があったからです。仕事に関しては、成功していたのでしょうか？

もっとも、つまらなかった、時間の無駄だった、二度と関わりたくない、そう思うならいたしかたありませんが。

なにもない、すべてを失くしたというけれど、あなたにはだいじなものがあることを忘れてはいけません。与えられた能力を生きることです。それはすなわち、あなたの生命を生きることなのですよ」

それきり、ラウレンス氏はもう、私には興味を失ったようだった。

毎朝、髪を撫でつけ、襟を正し、出かけていく。そして天気の良い日も荒れた日も、日がな一日、サロンに入り浸っていた。

073.

ラウレンス氏と同室の少年、ヤスノスケが私の部屋を訪れるようになり、話相手になってくれた。

私は仕事上、いずれは独語や仏語が必要になると考え、かねてから研鑽を積んでいたのだが、おどろいたことにヤスノスケは英語も独語も仏語も聞き分ける。そして方言だらけの、妙な日本語をしゃべる。日本人には違いないが、おかしい少年だ。

ラウレンス氏とはいったいどういう関係なのだろうと不思議に思っていると、ヤスノスケは「おれ、ヨーロッパってとこへ勉強しに行くんだ」という。

学校へ入るのかと訊くと、「ううん、おれの親、そんな金持ちじゃねえし、だいたいおれ、そんな頭ねえし。だから、先生のかばん持ちでも掃除でもなんでもやるから連れてってくれって頼んだのさ。学校へ行くばかりが勉強じゃねえやな」

「きみが先生と呼んでるあのひとは、何者なんだい？」

「ミネハロジスト」

「は？」

「あ、えーとね、鉱物学者で、リェージュ大学の教授」

「学者先生？ ほんとに？」

「ウソじゃねーって」

「へええ、親御さんはよく許してくれたもんだね」

「まあ、反対はされたさ。けどうちの親父もおふくろも先生のこと大好きだし、信用してたから」

「……信用、か」

「そうそう。信用ってだいじだぜ、楡山のにいちゃん」

ひと回りも若い少年から信用について説かれるとは思わなかった。

我々が乗船した船はヨーロッパ行きなので、私の切符は新加坡(シンガポール)までだ。

新加坡へ着いたら仕事を探さなければならない。そこには前に勤めていた会社の支社がある。日本人社会などというものは狭いものだ。支社の連中と顔を合わせずに済むだろうか……あれこれ考えると気が滅入ってくるが、身投げの衝動は去ってしまったし、ヤスノスケと一緒にいると気がまぎれる。

船は新加坡に一週間、停泊する。ラウレンス氏はやはり毎朝出かけて行き、私はなおも心を決めがたく、ぐずぐずしていた。

夕刻、ディナーに誘われた。とうとうお別れの時がきたかと観念し、めいっばいめかし込み、ラウレンス氏についていった。そしてある人たちと会食をした。見た感じ、ヨーロッパ人に違いない。がどことなくエキゾチックな容貌の、クセのある英語を話す人たちで、名乗った名もよく聞き取れず、それでも会話には困らなかった。

これがラウレンス氏らとの最後の晚餐と肚をくくった私は、彼らとのなんでもない会話を楽しんだのだった。

#### 074.

深夜、荷造りの仕上げをしているところへラウレンス氏がやって来た。先刻のディナーのテーブルにいた中年男性がひとり、いっしょだった。はて、なんの用だろうか。

「いろいろ考えました」とラウレンス氏は切り出した。考えた？ 何について？

「もちろん、あなたの先行きについてです。あなたの商才を活かすのに、シンガポールは持ってこいんです。しかし日本人が多く駐留しているのだそうですね。それではあなたもにくかろうと、別のルートで考えていたところへ、思いがけない情報が入ってきた。ポル〇※□%△公国の皇太子一行がシンガポールに滞在中で、これからオーストラリアへ向かうというのです。え、もう一回言ってくれって？ △※□\$〇&リア公国です。南アドリア海に面したれっきとした国です。さっきあなたがおしゃべりしていたのは公国の皇太子殿下です。彼はあなたを家庭教師として採用しました。あなたは彼に随行してオーストラリアへ行けるのですよ」

あ然とするやら愕然とするやらである。ヨーロッパのなんとか公国の皇太子の、家庭教師？？一文無しなのに、オーストラリアへ？？ おとぎ話か？？ この話、ジャンルがおかしな方向へ行ってないか？？ もしかして私は売られ、大金がラウレンス氏のふところへ――



「はっきりいって、あなたのお国とオーストラリアとの関係は、よくありません。オーストラリアは日本人を受け入れたくない。あなたが単身で入国しようとする、ハードルが大変高い。けれどもまったく可能性がないわけではない<sup>1</sup>。

あなた次第ということになりますが、後ろ盾があった方が安心。ね？」、とラウレンス氏は、話をなんとか公国の随行員だという人に振った。

「数日前から話を聞いておりました。事情はわかりました。あなたはシンガポールで我々が採用した日本人で、名前は、桧山正太郎。いかがですか」

い、いかがなものにも、そんなことができるのか！？

「皇太子殿下も外務省の人間も、いいとってるんですから、いいんですよ」

---

<sup>1</sup> 20世紀初頭、オーストラリア政府は世界の強国になりつつあった日本を非常に警戒していた。1901年に制定された『移民制限法』にはアジア系移民の入国を拒否するとは書かれていないが、入国を希望する外国人に「ヨーロッパ語(英語は含まれない)の50語の書き取り」という、言語テストに合格することを義務づけた。なぜ英語が含まれなかったのかというと、英語に関しては、日本人の学力ならばなんら問題がなかったからである。皮膚の色で入国者を選別すると人種差別となるが、学力の差で選別することでその非難や軋轢を避けようとした。

075.

こうして私は、さる公国の皇太子殿下に経済をお教えすることになった——。

外務省の人は、「私の傍から離れないでください、あなたはラウレンス教授から紹介された要人なので、だれにも手出しはさせません。むしろ、ボディーガードをつけたいくらいです」、という。ラウレンス氏は有名人なのか？

「皇太子殿下はリェージュ大学留学中に鉱物学を学んだことがあるのです」

つまり、ラウレンス氏の教え子だということだ。なんということだ——

「ラウレンス教授は殿下の憧れのお人なんです。その人が困っておられれば、喜んでお役にたとうと、殿下はそういわれました」

そうなのか——それにしても——

「実はブリスベンに私の友人がいてね、一応、その人宛てに手紙をかいとおきましたから、何かの時に、これをもって訪ねてお行きなさい」と、ラウレンス氏は言った。

なぜ——見ず知らずの私なんかのために、そこまでしてくださるのか。巧妙にだまされているのかやはり売られたのか——まあ、私なんぞに高い値がつくわけがない。西洋人のなかには衝撃的に美しい人がいて、そういった人たちの価値は理解できるが、典型的日本人男子の容貌と体型である私なんぞに需要があるとは思えない。あるいはそのもの珍しさゆえか！？

「なぜ？ それはねえ……何と言ったら信じてもらえるでしょうか、あなたが不審に思うのも無理はありませんからね。

わたしはつい最近まで日本にいたのですが、ある時、啓示を受けたのです。それは、今まで出会った人、これから出会う人、皆、赤い糸で繋がっている、というものです。一度はいつかどこかで出会った同志なのだ。一人残らず、私の力になってくれる人たちなのだ」と啓示は告げました」

ラウレンス氏はそこで、ふっと笑った。

「このような話を、わたしが誰彼かまわずしていると、思わないでください。打ち明けていい相手は慎重に選びます。だからわたしは——セーラム皇太子殿下の方からまったく同じ話を聞かされて、びっくりしたのです。

ええ。セーラム殿下は国を出発した晩、わたしと同じ啓示を受けたのだそうです。もしもこの旅で困っている人に出会ったら、できる限りのことをしてその人を助けなさい。その人は、ひじょうに縁のある人だから、と」

——この人はいったい何を言っているんだらう。私が混乱していると、ラウレンス氏は私の肩を叩いた。

「わかっていただけだと思いますが、それはわたしたちの側の事情です。あなたにはあなたの事情がある。

あなたなら入国は可能でしょう。しかしその先は平坦じゃありません。覚悟してください」

076.

私はなんとか公国の瀟洒なクルーザーに乗り替えた。

「さあ！ 南海の船旅を楽しんでください！ ブリスベンはずばらしいところだそうですよ！！ お元気で！！」

「さよーならー！ 桧山のにいちゃーん！ 達者でなー！！」

私の名は桧山正太郎。

死出の旅路の途中で知り合った外国人の学者とその連れとの二人組が、私の運命を変えてしまったらしい。

太平洋のどこかで身を投げる予定だったが、あれよあれよという間に、なんとか公国……どうしても覚えられない！……の貴人のお供として、オーストラリア行の船に便乗している。

今は死ぬつもりはこれっぽっちもない。

私が傷つけてしまったふたりの女性、信頼を裏切ってしまった父母はじめたくさんのひとたちへの贖罪として、この命を投げ出そう。

生きるのだ。私に与えられた能力をもって、私の生命を。

時に1925年 晩秋。

1・「Red thread」

2・「Homecoming」へ続く

## あとがき

『リ・コンストラクション』は、『nanako-fifteen』から始まった現代編で、nanako-fifteenが西ノ宮奈々子編ならこちらは桧山健編。ナンバーリングもnanako-fifteen II から続いています。

桧山健はオーストラリア生まれ。

彼の曾祖父が大正時代に移住したからですが、当時の白豪主義の国へ、日本人は移住はおろか入国さえまともにできなかったはず。幼い時に父母と死に別れた健は何も知らされておらず、当人も次の章でそのことで頭を悩ませますが、ええ、ラウレンス先生も筆者も悩みました。

曾祖父・正太郎氏は国籍を偽ったり不法な手段を使ったのではない。他人の手助けを受けながらも自分の力で人生を切り開いたのですが、百年前のご先祖がどう生きたのかなんて、知る由もない。いつの日か、健は正太郎氏の生きざまを知るかもしれませんし、結局知ることはないかもしれない。けれど、彼には胸を張って生きてほしいという、筆者の思い…親心か…から『Red thread』（赤い糸）を冒頭に置きました。

表紙ですが…

nanako-fifteen II はライトノベル風にしてみました、ってな動機でそれなりの画風の絵を使いましたが、この手の絵柄は中身もこの手の漫画と思われる向きもあるようで…まあ、筆者にはなかなか楽しい体験ではありました。

今回ののは、とにかく、硬質かつシンプル。ということでスチールとコンクリートマテリアル。第何章までいくかわからないので表紙にあまり労力を割きたくなかったりしまして、シンプルにいきたいと思います。

2025年2月22日 記

## 奥付

リ・コンストラクション

第一章 Red thread

2025年 2月28日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「[イラストAC](#)」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社